

令和2年度第1回青少年問題協議会  
ユースワーク推進部会 議事録

開催日時	令和3年3月25日(木) 午後1時~午後3時
開催場所	Web会議
出席委員	両角部会長、竹田副部会長、今村委員、小倉委員、川野委員、李委員(委員は、50音順)
議題	(1) 尼崎市のユースワークにおける取組状況とその成果及び課題について (2) 令和3年度のユース交流センターの取組状況とその成果及び課題について (3) その他
資料	・ 資料1 尼崎市の青少年施策等の現状 ・ 資料2 令和2年度ユース交流センターの現状

#### 開会

- ・ 副部会長の選任
- ・ 規定に基づき、副部会長を指名。

#### 協議事項1 尼崎市の青少年施策等の現状

- 資料1に基づき、事務局から説明

#### 部会長

まずは事務局から説明がありました青少年施策全般について意見交換できればと思います。そのあとにコロナ禍におけるユースワークについて意見交換をしていきたいと思います。何かご意見等あれば、ご発言をお願いします。

#### 委員

18歳以上との関わりが気になっていて、この後、支援に関する連携の部分も出てくると思いますが、18歳以上に対する全体的な施策について検討されていることがあれば教えてください。

#### 事務局

今、ユース交流センターで、さまざまな居場所づくりをさせていただいております。中高生はもちろん、大学生や18歳以上の方もユース交流センターを利用いただき、学習の場、活動の場として利用いただいております。

それ以外にも、青少年団体、ボーイスカウトやガールスカウト、子ども会などとの関わりをもたせていただいている。成人式や、他都市にはあまりない、「少年音楽隊」という、小学5・6

年生を対象にした活動などを今尼崎市では取り組んでおります。

## 委員

私はまだ、尼崎市の取組自体に理解が薄いところもあり、非常に参考になりました。一見すると非常に充実しているようにも見受けられました。私が知っている他の自治体より、施設面でも取組面でも、充実しているように感じましたので、質問を2点させていただきます。

前回から時間も空いてしまいましたので、ユースワーク推進部会が何のための部会で、部会に何が求められているのかを改めてお示しいただきたい。2点目は、尼崎市の取組の中で、何が課題とされているのか、何をより重点的に進めたいのか、教えてください。

## 事務局

前回、11月に全体会を開催してから、時間も経っておりますので、おさらいという形になりますが、青少年を取り巻く環境が日々変化しておりますので、その時代に応じた課題、問題点をより専門的に部会のほうで審議、協議していただきたいと思っております。また、ユース交流センターを含めた、青少年の取組についてPDCAサイクルという形でいろいろご意見をいただき、青少年施策に繋げていければと考えております。

尼崎市とユース交流センター指定管理者とで毎年、モニタリングという形で業務を確認するということをしております。その結果を今後皆様にお示しさせていただいて、その上で、改善点などアドバイスなどをいただきながら、いろいろ取り入れていければと思っております。

## 委員

それから、今回は3点論点を示していただいておりますが、毎回このようにいくつか論点をお示しいただいて、それに対して議論をするということができれば、この部会は成功だと捉えていただけるのでしょうか。

## 事務局

今後もその時点に応じた、課題、テーマみたいなものを考えて、さらには皆様からご提案などいただきながら、部会長と相談しながらこの部会の中で協議していければと思っております。

## 委員

私からの質問は以上です。また、次年度の大体どのあたりで部会が開催されて、その時何が課題になるであろうとか、この時のここに部会での議論成果をぶつけていこうみたいなことがあると思いますので、全体像みたいなものの中で議論が進められるとより有り難いなと思いたので要望とさせていただきます。

## 委員

先ほどのコメントにあるように18歳以上の取組、中高生以上の年代への働きかけや若者への取組が、尼崎の者としてとても気になります。というのはユース交流センターができて、ユース

交流センターについては市民としても、同じ界隈の活動者としても、何も言うことがないくらいすごく取り組んでいて、うちに関わっていた若者もすごくいい感じで過ごしているので、本当にできてよかったなと思っています。

ただ、指定管理者の中にも尼崎の団体は一団体しか参加していませんが、これは中高生年代への関わり、子ども・若者に関わる団体が、尼崎市ではまだ非常に乏しい状態で、そこにユース交流センターができて、ユースワークの取り組みが進められている状態です。委員が仰っているように、確かに一見充実しているように見えるかもしれないけれども、地域からすれば全くそんなことはないし、ユースワークのそもそもの目的は何か、どういう必要性があってやるのか、というところが、まだまだ地域の人にも、学校関係者にも理解はされていないと思っています。

その上での意見ですが、各地域課にもお話を伺っているのですが、尼崎市は今回、ユースワークを全市展開する、と掲げていますが、あまりにも温度差がありすぎるのではないかと感じています。温度差があるから仕方ないよねという問題ではなくて、ユースワークといった時に、居場所づくりをするのか、ティーンに関わる事業をすればいいのか、といったことが、各地域課の職員にも理解されていないから、それぞれが何をしたらいいのか、何ができるのかがわからず、止まっているのかなと痛感しています。

特に尼崎の場合は中学生にとってこのユースワークは居場所なのか、事業なのかは別として、それがなぜ必要なのかというのを、行政のほうから発信をしてほしい。それは行政内部に対してもそうですし、地域に対しての発信もそうです。

また、体罰、いじめ、性の問題など、あらゆることで学校の先生たちは困っていますが、それらは実は全て、ユースワークにつながっているのだということが、なかなか理解されていない。だからこそ、拒否反応もあるのではと感じています。

ですので、全市展開するとき地域課での温度差があまりにもあるということが課題で、その上で、地域課には居場所事業をボランチとして取り組んでほしいのですが、例えば地域の中学校の先生と組織単位で関わる、というところに高いハードルがあって、まだまだ実績が積み上がっていません。

最初は居場所事業じゃなくても、単に中学生が各地域で、部活単位でもいいので発表会をするとか、まずそういう取り組みを地域課主体でやっていただいて、各中学校が地域と関わりを持った上で、居場所づくりに入っていくのが良いのではないかなと思う。

ユース交流センターの職員の皆様は色んなところで見かけて、色んなところで動かれているのですが、こども青少年課の動きが弱くなった気がするのが気になる点です。

## 事務局

補足といいますか、市外の委員の方がおられますので、市内の施設の状況等を説明し、共通理解をさせていただければと思います。

冒頭の説明にもありましたように、尼崎市は6つの地区に分かれておりまして、それぞれの地区に2か所ずつ、計12か所、生涯学習プラザという貸室等の事業を行っている拠点施設が設置されておりまして。その6つの地区にそれぞれ地域課がありまして、そこに地域担当職員が配置されておりまして。市内には41校の小学校があるんですが、それぞれの小学校に1人担当職員がつ

くというような形で、その小学校区のいろんな地域の取組について、その地域職員がサポートしているというような状況で、地域活動が進められています。

## 部会長

有難うございます。他の委員から何か質問、コメントありますか。

私のほうから、今、いろいろご指摘いただいたように、このユースワークに対する理解というものが、どのように学校やその他の領域に広がっていくかということは、尼崎市だけでなく、日本におけるユースワークの理解という全体的な問題であると思っています。

今回の青少年施策の中でも、「青少年の自主性の育成」という文脈でユースカウンスルが出てきているのですが、一見何もおかしくないように見えるのですが、ユースワークが若者の主体性を育てていくことを目的としている。それはとても教育目的が強いなと思っています。

例えば、尼崎市を自分たちの社会だよねと思っていく感覚、それがまずあると思います。いろんな主体が参画できる社会を作っていく、そのためのユースカウンスルという位置づけにすると、ユースが社会に参画していく、影響力を与えていくという意味合いを強めていく、という目的になるはずなんです。

この街を自分たちのものにしていく、というのが実は青少年施策であり、尼崎市の街づくり全般に関わってくることだと思っています。

その中で自主性が高まる、進路が開けるということもありますが、それはアウトカムというか、副次的な目的である可能性が非常に高いです。青少年の教育施策、という形で「教育」が入ってくると、どうしても教育的な要素も絡みながら、ユースカウンスルが進んでいくことになります。

これは、日本のユースワークや若者政策の研究者全体の課題でもあるのですが、ユースワークの目的の整理ができていなくて、教育施策の文脈の影響を受けたものになってしまっていると思います。

あと、青少年という言葉もどうかと感じます。青年というのは男女両方に使えますが、少年というのは、boys ですよ。少女が入ってないというのを、いつか委員からご指摘をいただいて、そういった表現の転換も求められていると思っています。

ちなみに、青少年は0～30歳というものを指しています。若者は12～30歳です。最近ではポスト青年期というものがあり、40歳まで埋めようという話もあります。

## 委員

総論と各論が私の中でうまく繋がってなくて、総論、各論を少し整理して進めていただくのがいいかと思います。

最初にお伺いしたいのは、この部会が青少年施策全体に対して議論する場なのか、ユース交流センターの運営に関して議論する場なのか、または尼崎市におけるユースワークとは、といった総論を議論する場なのか、それとも総論とユース交流センターの運営を全部繋げたうえで議論を進めていくのか、全体と部分の話が少しわからなくなっておりまして、論点で今回出てきているのは、コロナの話や、利用者を増やしたい、全市展開の話、そして学校と地域福祉の連携という恐らくこれはユース交流センターの運営上の論点であり、各論であると思っています、それを部会

の中で議論するのはいいんですが、自分の理解として、大きな話なのか、部分の話なのか、今日はどっちなのかというのを整理していただけるとありがたいと思っています。

### 事務局

結論的にはどちらも、という話になるんですが、一つこのユースワーク推進部会に期待されている役割としては、全市的にユースワークをどう拡げていくのかが非常に大きな論点の一つになっています。それとは別で、ユース交流センターが尼崎市内のユースワークの拠点施設の一つでもありますので、その運営の各論についてもご助言いただきたいというところです。その2つがこの部会に期待しているところです。

### 委員

資料を拝見すると少年音楽隊とか、青少年施策を行っているグループがいくつかあると思うのですが、その中でもユース交流センターが中心的な部分を担っていて、他の団体の運営もどう改善していくかを方向づけて調整していくイメージですか。

### 事務局

従来、市が行っています少年音楽隊等の取組があり、そういった取組にももちろんご意見を頂ければと思いますが、今後のユースワークに向けてこういった取組をすべきかというご提案や、議論をいただけると非常にありがたいと思います。

### 委員

ユース交流センターの運営を考えることが、青少年施策全体を考えることとほぼイコールになっているという理解であっていますか。

### 事務局

難しいところですが、ユース交流センター自体は施設の一つにしか過ぎませんので、どうやって市全体にユースワークを拡げていくのか、という点はもっとも大きな論点だと思っています。

また、そもそもユースワークとは何かという点も含めてですが、本市では、どちらかというところ、少年音楽隊などの、比較的年少の子どもに対する取組が多く、ティーンと呼ばれる年長向けの取組があまりない状況です。そういったところもユースワークの視点から、どういう取組をすればいいのかという議論がこの部会の中で行われると非常にありがたいと思っております。

### 委員

先ほど部会長の仰った一つめの話に関わると思うのですが、若者が主体的に活動していく下地を伸ばすという部分で気になったのが、自主グループの数が増えて登録団体数が63も増えて、すごく望ましいことだと拝見していたんですが、実際どんな団体が増えているのかを見ると、参考資料の中の16ページに各種青少年団体4団体、育成団体7団体、青少年グループ28団体と

なっており、このあたりの数が増えていると推察させていただきました。その中、青少年グループというのが、中高生が主体となる団体になると見ているんですが、5人以上で構成して、1人成人がいないといけないという形になっていまして、責任もって見守ってくれる大人がいるというのは未成年なので必要なという思う一方、例えば高校生、義務教育を終えた年齢に関しては、管理監督者は無しで、その施設の職員がきちんと指導するとして、登録団体を作るのに成人がいなくてもいい、というあり方も一つではないか。5人以上という制限も、例えばバンドを考えた時に5人居なくてもバンドは成り立つと思うと、5人がネックでチームが作れないこともあるのではないかと思います。その辺の融通があってもいいのでは。

若者たち自身が、主体的に市民として社会資源を活用しながら、自発的に動くということをイメージした時に、私の中で浮かんできたのは、ある施設で取り組んでいる、中高生が自分たちで、大学でいう同好会のような、学校の部活にはなり得てないような、学校を超えて繋がって、鉄道同好会みたいな感じで盛んにやっているのを視察したことがあるのですが、そのように自分たちの世界を広げていくために公共の場が使えるようになると豊かになるのではないかと思います。

運動、音楽が多いというところで、文化、芸術的なものが広がったらいいなと書いておられて、私もそう思うんですが、スポーツ、音楽、ダンス、その他、と書かれていて、その他が何なのかが気になりました。

別のところでは、サテライトをあと2拠点展開すると書かれていて、進捗状況はどうかということと、サテライトをすることで見えてきた特有の課題、特徴、あるいはサテライトと本拠地の効果的な連携というものが見えているのか、いないのかも興味のあるところです。

小学生の利用が21.5%とのことですが、義務教育終了後に青少年が引きこもりに移行していくことを防ぐという記載もありますが、その意味では、学校教育と連携して、社会見学の中に位置づけ、必ず義務教育の間に1回は全員がセンターに訪れるような仕組みを作ると良いのでは。

いざという時に、そういえばあんな施設あったなと思いたすことができるし、1回入っていると不安感が少し減って、ああいうスタッフがいた、ああいう場所だったと思ったら敷居が低くなるんじゃないかと思います。

ユースカウンスルについては、政策立案とあったので、すでに立案化されたことや、立案までいなくても皆で声を集めて政策について考えたという実績があるのであれば知りたいです。

今回のテーマであるコロナの中でのあり方というところでは、まさにこういう状況の中で青少年当事者としてはどうあってほしいかというのを、声を集めるというのも一つの方法かなと思いました。

## センター長

まず、施設の利用についてですが、青少年グループと青少年スタジオの利用グループに分かれておりまして、5人以上というのは青少年グループというところになります。

音楽スタジオについては、2人以上で利用可能という形になっております。

音楽スタジオは高価な楽器等も置いていますので、小学生だけの利用はできません。青少年グループについては、特に年齢制限はありませんので、中学生のみのグループや、高校生のみ

グループでも可能になっています。

ただ、今お話にありましたとおり、センターの中でも1人で楽器の練習をしたいとか、グループではない、というニーズも高まっていますので、ニーズについては再考していく必要があると考えています。

グループを作れない5人以下の団体は、センターの職員が入ったり、紹介をしながらグループを作ったり、センター職員と一緒に利用するということがありますので、そうした形で自主的な活動を増やしていきたいとは考えています。

その他の2団体の内容は、今、手元に無いのでわかりかねます。

サテライトについてですが、やはりいきなりはセンターに来られない子も多くいますので、サテライトで出会ってセンターに来る、という子が少しずつ増えてきていると感じています。サテライトの会場があることで、若者と出会う場が増えていると思っていますし、サテライトの会場自体も我々が全部運営しているわけではなく、先ほどの話にもあった、地域課職員であったり、地域の団体、地域の住民の方であったりにも入っていただきながら運営をしている状況です。

ですので、センターからサテライトの会場に行って、そこで大人と出会うという状況も少しずつ増えてきていると感じます。

小学生の利用についてはすごく面白い意見ありがとうございます。我々の発想には無かったんですが、是非実現できればと思います。

ユースカウンスルにつきましては後ほど私の発表のほうで少しご説明させていただけたらと思いますので、ここでは割愛させていただきます。まだ12月にスタートしたばかりで、形になった実績は今のところありません。

## 委員

グループの人数が足りない場合に、条件を緩めるという私の発想だけではなく、足りない部分はスタッフが繋いでいくというのでもいいイメージ、いい効果がありますよね。

## 部会長

そろそろ次の議題に入りたいと思うんですが、コロナ禍でのユースワークの在り方について、各委員のほうから順番に、実践等のご紹介を頂ければと思います。それでは委員名簿の順にお願いします。

## 委員

事前にいただいた論点については、メールで部会長、事務局、センター長にお送りしていますので、ご参考いただければ助かります。部会での代読等は必要ありませんので、何か必要がありそうであればピックアップしていただければ十分です。

私からコメントさせていただけるとありがたいのは、委員もおっしゃったように、総論と各論がちよっと混ざった中で部会をやっていくと、あまり生産的ではないかなと感じました。ですので、序盤では、あまり各論に踏み入らずにこの部会が何を目的とするのか、何を議論するか、どんな成果を目指すかという総論よりさらに前の部会の進め方について議論できるといいかと思

います。

今日の3点の議論は、私が尼崎の現場感到疎いということもあり、皆さんより少しついていけないところがありましたので、部会の組み立て自体を共有していけるといいかなと思いました。

本来、コロナ禍がなければ、私たちを現場にお招きいただくところから、この部会を初めていただく想定だったことは存じていますので、それが叶わなくなった状態からどのようにするかを検討できるといいかなと思いました。

また、この論点において、事務局や部会長に対して、私たち委員がお手伝いできることがありましたら全面的にご協力したいと思っておりますので、未熟者ですが今後ともよろしく申し上げます。

## 委員

施設をどうしていくかというのは、他の方から全国の事例があると思っておりますので、市内の話は私からいたします。コロナ禍での施設運営についてですが、ユース交流センターは様々な取組を継続していましたが、センター以外の施設では、指定管理制度の中での判断に委ねるところもあると思うんですが、対応が不十分だと感じる施設もあります。コロナで全校一斉休校になったり、今でも子ども関連の事業がまだ止まっていたりする場合もありますが、こうした状況で、漠然とした不安感で子どもたちの受け入れを止めている施設・団体もあります。全てがユースのような市の拠点施設というわけではなく、地域の拠点施設なのでもっと狭い施設もあり、また全てがオンライン対応できるわけではないし、全てがオンラインに移行することが望ましいわけではないとも思っていますので、そういう意味で、教育行政内部のことかもしれませんが、コロナ禍であっても、また休校という事態になっても、子ども関連の事業を止めない、あるいは公共施設から座る場所を排除するようなことをしないというところを内部で位置づけておくというのが必要ではないかと思っております。

## 委員

私が関わっている施設でコロナ禍に行ったのが、オンラインでの講座の取組ということで、カタリバさんも参考にさせてもらいながら、朝1時間、夕方1時間繋がりたい人は繋がってという形で、ライブでスタッフと喋ったり、何かプログラムを実施したりしていたのと、You Tube でどんどん配信するようになりました。始まりは、家に居る子どもたちが、見慣れた顔や声を聞けて安心できるようにしたいと始めたのですが、今は、毎週1回配信していて、やっている取組をどんどん紹介していったり、スタッフを紹介したりすることになって、いいPR動画になっているというのが一つです。

その中で、見て楽しんでもらえるように、スタッフがいろんなことに挑戦する動画を作ったんですが、それは布石になっていまして、その動画を見て私たちも何か挑戦したいと中高生が思って、開館してから言ってきたら、私たちが、それを応援するというふうになればいいなと思っていて、やっと1人やりたいという子が出てきました。この間、You Tube にその子の動画を上げるところまで行きついたんですが、そういう今の時代に合ったSNSや動画を使ったユースカルチャーの取組に繋がっているなと思っています。

あと、コロナとは関係ないんですが、多様性を認め合う人づくり、街づくりをしたいというこ

とで、おしゃべり会のようなものをスタートさせて、LGBT について紹介したり、常識ってなんだろうとか、恋愛ってどう思うとか、そういう思春期の子たちと一緒に考えたり、語り合ったり、正解のないテーマを語り合うという場作りをスタートさせています。

## 委員

我々が取り組んだことですが、行政から、休館中の相談は電話、メールで受け付けてくださいと話があったので、それを対外的に発信するというのをしていました。

緊急対応としては、センター自体も休んでいたんですけど、非行少年たちの学習支援の場としても活用していたこともあって、これは京都府、警察と協働で実施している事業ですが、これに関しては、事前に話をつけて会場を使ってもらいました。

あとは、子どもたちの声を聞くとか繋がりを保つためのオンラインサロンとか、電話掛けということもしていました。実際にはセンターに来てしまう子もいたので、玄関の外で数分間、話を聞くこともしました。

オンライン事業の展開としては、休館中に、7つ施設があるので、連携しながらパスを投げ合ったり、何がバズるかみたいなことを仕掛けたりしていました。ボランティアとの交流サロンは、ボランティアとの繋がりだけではなくて、知らない相手でもいいので、まずは募集をかけてみることもやってみました。対話型パブコメやインスタグラムでのおうち時間で生まれた若者文化発信をしました。

オンラインじゃない部分の事業展開としては、聞いた声をベースに少しずつ発信していこうということであるとか、ユースシンポジウムを毎年開催しているんですが、9月頃に、この半年を語ろうぜという対話型にこだわってやりました。いろんなグループが発表会の機会がなかったり、文化祭がなくなったりしたので、かなりクローズにして、来る人も限定するような発表会を何回か行っています。

今年度はいろいろ試行錯誤が多かったかと思うんですけど、今後に関しては、今集めた声をベースにニーズ分析をしていこうとか、根拠となるものとして青少年白書のようなものがあるといよいよねというような動きが起きています。

あと、オンラインは併用して実施することが必然課していますが、正直まだ何が合って何が合わないかというのは試行錯誤の段階かと思っています。

大きい意味で考えると、社会のルールも正解もない状態に、大人も若者も関係ない。次の社会像を作っていくとか、先ほど話があった影響力を高めていくというところが、持っておかなければいけない大前提なのかなと感じています。

## 委員

私は、普段は貧困世帯の子どもの支援を中心に行っているものですから、実践の中でのコロナ対策ということでお伝えさせて頂きませんが、基本的にはそんなに目立ったことをしているわけではないんですが、まずは感染予防としての検温とか、アルコール消毒とか、そういうものを徹底しています。施設の消毒も定期的に行っています。その上で、マスクの着用、ソーシャルディスタンスを保ちながら運営をするということを全施設共通で行っています。あと換気を徹底すると

か基本的なことはやっていますし、それをガイドラインにして各スタッフに研修をしているというところになります。

オンラインの話でいくと、一斉休校中でしたけど、オンラインでの学童とか、オンラインでの居場所、あるいはオンラインでの学習支援など行っていました。

今は、運営はオンラインではなく、オフラインベースに戻していますので、基本的には通常運転しているわけですが、一部コロナの影響で、対面が難しい、対面だと怖いというお子さんもいらっしゃるの、そういうお子さんに限ってはオンラインを継続している形になります。

あと、関連するところで言うと、子ども食堂なども運営をしていたんですが、軒並みそういう運営ができませんので、代わりにフードパントリーという形で食材を施設に並べて、それを市民の方、利用者の方、いろんな方に広くお配りするようなことをしています。そこに子どもたちが運営に参画しているといいますか、一緒に運営してくれて、そこにいる子どもたちが主体的にこういうことあったらいいんじゃないかと考えてくれてその運営に協力してくれる。その中で、その拠点の利用者のみならず、地域の方々や、他の支援の施設の利用者もやってくるので、色んな交流が生まれたり、特に地域の自治会とか商店街の人とか、地元の議員さんも含めてですけど、そういう方々との交流が自然に生まれたりしているというのは、いい変化、いい影響が出ているところかと考えています。

#### 部会長

ありがとうございます。それでは、センター長、ユース交流センターの取組を、コロナ禍のユースワークのことに限って報告いただけたらと思います。

#### センター長

コロナだけではなくて、協議事項（2）の説明もさせていただいてよろしいですか。

#### 部会長

わかりました。お願いします。

## 2 令和2年度ユース交流センターの現状

### センター長（資料に基づいて説明）

#### 部会長

ありがとうございます。このまま委員にコメントをお願いしたいと思います。

先ほど申し上げた通りユース交流センターのコロナ禍におけるユースワーク、一般的なコメントでもいいですが、それに加えてユース交流センターの周知方法と学校や福祉機関との連携方法についてそれぞれ委員から順番にコメントいただければと思います。

#### 委員

1点目は、コロナ禍の間、ユース交流センターでは、オンラインやSNSで子どもたちの声を聞

かれています。地域の者からすれば、子どもたちのための場所が閉じられてしまって、子どもたちの声が聞こえないという状況が続いていたので、可能な範囲で集められた声を発信していただくと、地域の方も閉じていたらダメだという動きにつながるのではないかと思います。

2点目の周知方法ですが、学校の先生からすると、学校外で問題発生源が増えることは、対応が大変で負担になる。男女の問題でも、生徒同士が付き合うとか付き合わないとかは個人の自由で、そこに介入するのは生産性のない話になってしまう。

とはいえ、広く学校の先生が子どもたちを応援するために、地域資源とか、外部連携というような研修の一つとして、ユース交流センターと学校の関係とか、学年を超えた子どもたち同士の関わりとか、あるいは京都の研修でも尼崎の研修でもありました、少人数のグループプロセスを大切に子どもたちとの関わりとか、そういったことを研修に盛り込んでいただいて、ユース交流センターができたことで、問題発生源が増えるわけじゃないということを少しずつ、地道にお伝えいただくのが良いと思いました。

もう一つは、学校教育課の社会力育成事業というものがあります。中学校の生徒会を対象にして社会力、大方やっているのがごみ拾いをしたり、募金活動をしたりとかそういうものですが、こういうところでまず生徒会から関わるということをしています。

子どもたちと地域との関わりは、どうしても決まりきった形でしか行われず、自分たちが社会に声を発信するというにつながらないので、こういうところにユースカウンスルとか、ユース交流センターの関わりが増えていくと、まず生徒会からかもしれないですが、先ほどの委員の小学生の社会見学のような形で少しでも知ってもらうのが良いのではないかと思います。

最後に学校や福祉との連携ですが、センターのユースワーカーの皆様には、センターとして徹底して子どもたちの側に立って、その声に寄り添っていただきたいですし、逆にソーシャルワーカーとか、いくしあのワーカーとか、そういう方々が学校とか関係機関への後ろ盾がもてるようお願いしたい。子どもたちの学びと育ちのためには学校教育だけじゃなくて、社会教育もユース交流センターも必要なんだというところを行政内部で共有して、ワーカーさんたちが困らないようにしていただきたいと思います。

あと、スタッフ研修は、具体的にどういうことをしているのか気になったところです。

## 委員

コロナ禍のユースワークですが、先ほど申し上げていなかった点で思っているのは、極力、場を閉じないというのは貪欲に追及してほしいと思っています。無謀なことではできないので、定員を減らさないといけないとか、瞬間来場者数を減らさないといけないとか出てくると思うんですけど、少人数でも行ける場所があるというのを残しておくというのがすごく大事だと思っています。

また、大学生などは、体験の場が本当に減ってしまったということが、若者の育ちにすごく影響を与えるだろうなと思っています。行政の場合、公正平等ということが求められるので、少人数のためにやるのはどうかという議論が出てくると思うのですが、実施することの必要性を実感しています。

周知方法は、先ほど言いました社会見学が一つと、もう一つ、私も自分のところで働きかけようと思っているんですが、校長会に参加させてもらって、小学校、中学校、高校の先生にプレゼ

ンして知ってもらうのも一つの方法だと思います。視察の受け入れみたいな形で見ていただく、PTAの取組の一つに入れてもらうとか、地域学校協働本部とか地域コーディネーターさんが尼崎でも展開されているなら、そういう方々をお招きして知ってもらうのも一つの方法かだと思います。

また、不登校の生徒が入り浸っているということで、入り浸ると表現してしまうのはすごくわかるんですが、学校に返すということだけが、今や正解ではないという考えも出てきています。その子の育ちをどう保障していくのかという部分で、センターが担うものがもっと大きくなってくるかもしれません。センターはあくまでも繋ぎの場として、他のオルタナティブな施設、適応教室との連携とか、学校との連携とか、地域のフリースクールとの連携とか、そういうものも必要になってくるかもしれませんね。

場合によっては、そういう人たちがアウトリーチとして来てくれるような、センターに入り浸っている不登校の子たちと出会ってもらう場を作るのも一つの仕組みかもしれないと思いました。

不純な行為というところで、性にまつわるプログラムを交流センターだからこそサブカルチャーとしてできると思うんです。正しい性の知識を、清く正しく教えるというよりも、コンドームって見たことある？ここに来たら触れるよ、みたいな切り口で、保健師さんにも入ってもらいながら、センターのスタッフがプログラムを実施していく。性の取組は日本に本当に必要だと思っていて、自立を応援する公共機関として、先駆的なモデルになればと思います。性のことと、お金のこと。西成高校の取組がNHKで放送されていましたが、虐待、貧困も課題になっているエリアですから、性のことと、労働問題、不当なアルバイトで不当な扱いをされたときに、それは不当な扱いだということを、正しい知識として学んで、それをどこに言っていけばいいのかという力を身につけるような勉強ができるプログラムがあるということと、もう一つ、起業していく力をつける学びや、そういうモデルの話が聞けるという、学校教育で今まで担ってこなかった、自立して生きるということを保証する施策が、交流センター等を基盤にしながら、できていくといいなと思います。

## 委員

先ほどコロナのことは話しましたが、特に、若者がはく奪されているものはなにか、ルールも正解もない。次の社会像を若者とつくっていく。若者の影響力を高めていく。というところが特に大事なかなと思います。はく奪というと仰々しいんですが、参加の機会であるとか、表現の機会であるとか、社会の空気感や、実際の構造の中で若者自身が何か奪われているものがあれば、その中で私たちが担うべきものは何なのかを考えていくという前提が必要と感じています。

ユース交流センターの周知のところですが、割合のところ、中高生が6.5%で今はまだ少ないと感じると思うんですけど、口コミの影響力が一番強いので、中高生といい環境をつくっていくということを地道に、そして常にやる必要があるのかなと思っています。

我々がやっているところというならば、中学一年生向けのオリジナルクリアファイルを作って、新入生向けに配布して、学年全員知っている状態を作っています。これは毎年やらないといけない。また、高校生向けのオリジナルのチラシを作って、職員との関係の中で広報しています。

相手ごとの広報が必要なので、対象別で取り組まないといけないですが、関係機関とか市民向けというのはもう少し私も考えたいと思っています。

学校、福祉機関との連携ですが、クレームが来ることも、いろんな支援機関から照会がくることも、認知されているということであればいいことと受け止めたいと思います。

ただ、本当にワーカーが困っているだろうな、というケースはあると思うので、そこについては研修も必要かもしれません。

取組内容がせっかたくたくさんまとめられているので、年度初めの学校への挨拶と報告は行かれたらいいと思います。あと、依頼を受けたことの発信、講演依頼や、他のことも含めたパッケージで学校に入っていくたり、福祉関係の方とお話をしたりとかあると思うんですが、そういうところで積み重ねた関係性を違う機関の方にも知ってもらうためにも、講師派遣実績の一覧を作ったり、こういうところに行って、こういう反応をもらいましたとか、こういうことで注目を集めていますというような、他の関係者の方には知っていただくような取組も必要かと思っています。

学校からのクレームについて少し気になったのは、管理職から言われているのか、現場の先生から言われているのかで対応が違うということです。先ほど、校長会についての話もありましたが、管理職からであれば校長会向けですし、現場の先生からであれば、日常的にどこかで会う時に、先日こんな素敵な活動されていましたよとかいう関係づくりもありだと思っています。

あとは、学校との情報共有は必ずしもしないといけないものでもないのに、現場の職員があえてしないという選択肢を持つということも必要かと思っています。

## 委員

たくさんの工夫をされていて、たくさん利用者がいて、素晴らしい活動だなと思いました。

周知方法と福祉の連携に関してですが、周知方法でいうと、細かい手法で言うと皆さんからもたくさん出たんですが、率直に疑問なのが、ゴールはどこなのか。認知率が100%なればいいのか、利用者が倍になればいいのか、利用者が10倍になると困ると思うんです。利用者が増えれば増えるほど誰かにとって居場所じゃなくなっていくと思うんです。そうなった時に、ただただ認知施策を打っていくことがいいと思わないので、その辺をどう考えていくのか。

学校、福祉との連携でいいますと、まず大前提として、学校とのトラブルに関しては、子ども観であったり教育観であったりの価値観のすり合わせが必要になってくると思っています。それはおそらくこの部会の中でユースワークというものをどう捉え、青少年施策をどういう考えのもと、取り組んでいくのかという非常に理念的なところであるんですが、すべての前提にはなると思うので、この部会の中でもアウトプットして、それをもとに学校や関係者と対話を重ねていくしかないのかなと思ったところです。

細かいところでいうと、関係者と連携して子どもを繋いでいくフェーズと、実際に支えていくフェーズに分けてお話しするんですが、まず、繋いでいくフェーズに関していうと、最初にやるべきは、関係機関との顔つなぎは絶対したほうがいいと思っています。センターがあることが認知されていても、センターの誰々さんという、名前のついた顔の見える関係じゃないとうまくいかないの、まずそれをやるしかない。その上で、役割分担が見えてくるのかと思っています。

私の経験上、学校これしてね、ケースワーカーはこれしてね、スクールソーシャルワーカーこ

れしてね、という表にまとめて役割分担表を配ってもあまりうまくいかなくて、具体的にこの子をどうしようという1人のケースから連携を始めたほうがいいかなと思っています。なので、今、実際困っているケースとか、連携が必要だなというケースのお子さんに必要な連携を小さく初めていく、それを繰り返していくと最終的に尼崎の中での理想はできるんじゃないかと思います。

役割、役職がついていてもその通り動いてくれない人もいるというか、担当が変われば全然動いてくれない人とかいると思うので、SSW、ケースワーカーでも人によって対応が全然変わってしまう、学校でもそうだと思うので、そこは日々具体でやっていくしかない。どこかのタイミングで、子ども観、教育観もすり合わせられていって、変わっていきます。我々は葛飾区などで10年くらいやってきて初めてそういう連携が今できてきているんですけど、それを地道にやっていくのが「繋ぎ」のフェーズでは重要だと考えています。

支援するフェーズなのですが、聞いていますとユース交流センターの中に特別な対応の必要な子たちが繋がるケースも増えてくると思うんですけど、前提として、どこまで交流センターでみるのかというのを決めていたほうがいいと思います。施設も豪華でスタッフさんも優秀で事務局の皆さんのやる気も高いから、ケースが集まってしまうのかなと思ったんです。でも全部集まると全然対応できなくなってしまうので、どこまでやって、どこまでやらないのかを決めたほうがいい。やらないから子どもたちを放置するわけにもいけないので、次は他の生活困窮の学習支援とか、既存の社会資源との連携、棲み分けをどこまでできるかを考えるしかないかと思います。

既存の資源でも対応できないということもたくさんあると思うので、その場合はもう新しく作るしかないんじゃないかというのが我々の考え方で、我々の場合、それでどんどん自主事業を増やしていくというやり方をしているんですけど、基本は、ソーシャルワークの考え方ですけど、やはり子どもたちの声を聞いてそこを尊重して、資源が無ければ新しく開発するところまでがソーシャルワークだと思いますので、それを考えていくといいのかなと。かえてセンター内の機能を増やしすぎると運営がすごく大変になるんじゃないかと思いましたが、施設という資源があると思うので、その資源を、会場をうまく使ってもらおうとかそういうふうな活用の仕方は広がりとしてあるのかなと思いました。

## 部会長

ありがとうございます。これを受けてセンター長のほうから何かご回答等ございますか。

## センター長

委員から質問のあった研修についてですが、ユースワークについてはもちろん全員、子どもたちを取り巻く環境みたいなところも研修をしています。Learning for All の e ラーニングのプログラムを活用させていただいてまして、知識や理解はしっかり入れるようにしています。

委員の話であった認知度のゴールはどこかというところですが、100を目指しているという訳ではなく、どんなに頑張っても20%位じゃないかと話しています。20%がみんな来るというものではなく、何かあった時に助けを求められるというか、僕たちと出会っていることが大事だよねという話はしているので、会って少し話をして、チャットでつながっているだけでもいい

と思っています。

ただ、同時にやらないといけないと思っているのが、まさにユースワークの全市展開で、場所をどれだけ増やしていけるのか、人をどれだけ増やしていけるのかを同時進行でやらないと、何かあった時に残りの80%がもう学校の先生か塾の先生くらいしか頼りになる人がいないみたいな状況になってしまうと思いますので、サテライト事業だけではなくて、地域の方と連携しながらユースワーカーを増やしていくことをやっていかないと考えています。

## 部会長

ありがとうございます。私も周知のところに関しては何%が目標なのかというのは少し考えたりもしていて、委員が仰ってたとおりに、人がいっぱい来れば来るほど、いつもいる子がいなくなってしまう。ここは学校との役割分担になるのかなという気はしています。また、私のフィールドのスウェーデンでも同じですが、どれくらいの若者が利用しているかというのを調べたんですが、ほとんどの若者が入っているのかと思ったら全然そうではなくて、8割くらいの若者はそういうセンターに行ったことがないんです。月1回くらい行っている人も十何%にとどまるというのがあって、これは一応課題となっています。多すぎても少なすぎても良くないので、それで2割くらいなのかなと私も同じように思っています。

一方で、そういう場所に行かなくても、何か助けを求めるときにどこに行けばいいかを知っている、そういう認知度を高めていくというのは、これまで委員の皆様が仰っていたように、社会見学で連れていくというのも含めてやっていくのが大事だと思いました。

この間、うちの青少年教育研究センターで、オンラインフォーラムで片岡さんに出いただき、あるいはYMCAの方や、野外教育の活動の方に色々な話をしてもらったので、そこからも活動のヒントがあると思っています。

あと、国立青少年教育振興機構も、兵庫県に淡路青少年交流の家というのがございまして、青少年の利用は無料になります。こういうものがあるよとチラ見せすると若者がじゃあ夏にでも行こうかとなる可能性もあるかと思います。コロナ禍のユースワークで、野外だと感染リスクが低くなるのもありますし、YMCAさんがやっていることもありますので提案させていただきます。

周知に関しては、若者と街歩きするようなユースワークをして、若者がいるところにユースセンターがあるんだ、若者がいるところは全部ユースワークできる場所なんだという考え方が良いと思います。だけど気を付けないといけないのが、それは補導だったり、パトロールだったりだと若者が感じると警戒してしまう。だけど、ユース交流センターのジャケットとかがあって、あの人たちだというふうになって、何かあるとすぐに来てくれて、相談に乗れるというような活動が、スウェーデンの事例などありますので、そういうのも一つあるのかなと思っています。

学校、福祉機関との連携は皆さん仰っていたとおりでと思います。学校との役割分担だとか、青少年施策全般、学校教育も含めたというのが、どういう方向にいくのかが下りてこない、これがバラバラになっていると、クレームという話になるのかなと思いました。関係者とのワーキンググループを作る、勉強会やスタディーサークルを作ってやっていく、といった手段で、ビジョンを共有していくことが大事だと思います。

## 事務局

学校との連携という話の中で皆様にお聞きしたいことがありまして、センターに日中、学校のある日に来ている子どもたちがいる場合、学校からは来たら連絡してほしいという要望が出る場合があるんですが、そういった時にこのセンターとしては子どもの情報を守る、子どもとの信頼関係を守るという観点でなかなか難しいところもあると思うんですが、それぞれの団体、施設でそういう場合どのように対応しているのかアドバイスいただけたらと思います。

## 部会長

何か事例がある方お願いします。

## 委員

同じ悩みを持っていて、学校に行き渋りをしている子が来ることもあります。学校に知らせるかは、子ども本人の主体性や意志を尊重してあげたいと思っているので、なかなかつらいところです。でも先生が迎えに来て、来たら抵抗なく楽しそうに行くというか、そういう姿を見ていると、子どもが言っていることを全部受け入れることが常に最善の利益でもない、というのも実感しながらです。

私としては、自分の中で考え方を深めるにあたって、川西子どもオンブズマンのあり方を勉強しようかと今思っています。

どうその子の本音に付き合いながら作っていくかというところで、うちはオンブズマンではないけれど、一つの考え方として参考になると思っているところです

## 委員

本当にケースバイケースかなと思いますが、ほぼ連絡はしません。要対協で名前を共有しているとか、センターとのケース共有がある場合に関しては、することもあるかと思いますが、学校に連絡をする義務がないのでしません。保護者からもたまに問い合わせがあります。今日うちの子居ますかとか、それも本当にケースバイケースで、例えば親の同意を得て学習会とかプログラムに参加している場合でも、実際は来ていない、家には行って来ると言っていて来ていないんですが、参加していなくても近くの公園でこういうことしているから黙っておいてと本人が言うとか、本人の状態と私たちがプライバシーに関わることに介入していいのかという部分。相手との関係作りももちろん大事なのですが、それと、義務というか、介入する権利があるのかも含めて毎回悩んで検討します。

## 委員

基本的にそのケースを考えて、最善の利益のためにどうするかを考えるしかないかと思うんですが、情報共有は絶対にしないといけないわけじゃないし、したほうがいいならしたほうがいいのかと思うんですが、まず聞いてすごいと思ったのが、日中にセンターに通っていることに関心のある学校の先生がそんなにいるんだなと思いました。関心がないほうが多いんじゃないかと思ったので、逆にいうとその先生は管理教育っぽいんでしょうけど、気にはしているということなので、

その強みを生かして対話に持っていけるかが重要じゃないかと思いました。

このケースを通じて、この先生の強みを生かしてうまく対話にもっていきつつ、ユースセンター的な、我々が思っている子どもたちへの寄り添いの目線と、いわゆる適応指導みたいな話と多分バッティングするので、そこをどう乗り越えるかというところに話をもっていくのが最終的な、本質的な議論になるのかなと思っています。

## 委員

うちも怒られたことがあって、ちゃんと報告してもらわないと困りますと言うんですが、学校がそもそも把握していないことが問題ではないかと思いますし、私もケースバイケースかなと思います。ただ、地域と密着している団体、施設だと言わないわけにはいかない部分もあります。例えば低学年や幼かったりすると、検索願を出されたり、家は出たけどどこにもいないとなったりすると大変なので。ただ、子どもたちが近所をうろうろしているとかだと様子をみながら原則言わないし、難しいところだと思いますが、それで学校の先生が迎えに行きますというのを前提で教えてくださいというのであれば本当に困る話ですが、なぜこういう場所があって、ここに来ているのかというところを共有しないといけないと思うんですが、いい意味で心配している先生も多いので難しいと思います。

## 部会長

ユースワークの理念的には、やはりこれは若者側に立つというのがヨーロッパのユースワーク大会などでは明確に言われています。学校の道具になってしまっただけではいけないんだと、そういう学校が管理したロジックにユースワークが立ってしまっただけでは、それは学校の味方をしてしまうんだということなんですよ。

だから若者のことを考えて判断するんだと理念的には言っていますが、現場での対応はさまざまかと思います。

こういうときに気をつけないといけないのが、学校とユースセンターでの間の協定、ガイドラインを作ろうとなった時にこういう一文が盛り込まれてしまうことがあったりするので、そういうところを注視していかないといけないと思います。

私たちはこういうグレーゾーンにある、そこをフィールドにしているというところは守っていかないといけないと思っています。

## 事務局

ありがとうございます。明確に白か黒という話ではやはり難しいかなというのは皆さんの話からも伝わってきます。仰る通り、子どもや若者の最善の利益をどう考えるかというところをベースにしながら私たちも悩み続けるしかないのかなと思いました。

あと、委員にオンブズマンの話をしていただいたんですが、いわゆる子どもオンブズ活動ですけど、子どもの権利保障や子どもの意思表明権の確立を前提とした取組を進めていきますので、またその取組も皆さんに共有させていただけたらと思います。

## 部会長

センター長、これを受けて何かございますか。

## センター長

悩ましいなと思うのは、先生方も安全を確認したいというところもあるので、そのあたりがどうしても難しいなと日々感じています。

本当にケースバイケースかと思っているので、このあたりは皆さんとも共有させてもらいながら、進めていけたらと思っています。

## 部会長

ありがとうございます。以上で協議事項は終了となりますが、その他、事務局から何かございますか。

## 3 その他

### 事務局

今後のスケジュールについて少しお話させていただければと思います。

まず、部会は概ね、年に2回は開催したいと思っています。次回は8月頃開催したいと思っております。その時にはユース交流センターのPDCAサイクルという観点なども視野に入れてさせていただければと思います。市と指定管理者の目標なども定めた中で取組を確認していかなければならないと認識させていただきました。

あと役割分担ということで、PTAや進路指導の先生にも関わってもらってはどうかという部分は市が関与するのが関わりやすいかと思っておりますので役割分担なども明確にしながら、進めていければと思います。

あと、PDCAサイクルというのは、翌年度に向けて取組の内容を契約の中に盛り込むということが大切なことかと思っておりますので、通常は2月頃の開催時にPDCAを回すような会議をできればというふうに考えております。

来年度以降につきましては、取組のテーマを皆さんと共有しながら色々な話ができるような形でさせていただければと考えておりますのでよろしく申し上げます。

### 閉会

## 部会長

ありがとうございます。本日の尼崎市ユースワーク推進部会はこれで終了となります。ユースワークは、このようにグレーゾーンにあるということは避けて通れないですし、色々な圧もあります。しかし、どうするべきかとなった時に、立ち戻るべきは若者なんだということを改めて感じさせていただきました。本日はありがとうございました。